



日本大学
経済学部教授

加藤 一誠氏

教授に恵まれる

生まれも育ちも京都。実家は長く陶業を営む。一人っ子のため、高校卒業時には実家を継ぐか、大学に進学するか、家族内会議が開かれたようだ。地理を専攻することを希望していたが、京都で専門学科がある

大学は限られていた。受験浪人は避ける必要もあり、同志社大学経済学部への進学を決めた。当時は同大学ラグビー部の全盛時。後に日本代表になる大八木淳氏がキャンパスを闊歩していたという。大学院では米国の地域開発と交通政策を専攻し、紳

原胖夫教授と、後に学長になる笹田友三郎教授に師事した。「洋書を読んでほりポートを提出する」という日々で厳しく指導してもらいましたが、それが現在の礎となったと思います。本当に素晴らしい教授に出会えて感謝しています」と振り返る。

趣味を問うと、「田端義夫さんが好きです」と満面の笑みで即答する。「バタヤン」の愛称で知られる田端氏(1919年1月)は昭和を代表する歌手だ。岡晴夫氏、近江敏郎氏とともに戦後の歌謡界を背負

多く40歳代の私は一番若い世代です。「なつメロ」の心を美感できる、非常に良い「場」です」という。近年は航空・空港関係の研究に多く携わるが「機内音楽の選曲を私にやらして欲しいですね。バッチリ素晴らしい」「なつメロ」特集をつ

「バタヤン」をこよなく愛す

空港関係の研究に携わる

返る。

大学院生時代には、学内中学の教諭をしていたこともあり「教授からはとにかく論文を書くように」と指導されていきました」と語る。また、11年勤めた関西外語大学では何種類もの科目を教えることになり「これが非常に勉強になりました」

い、最近まで舞台に出演していた。小学生時代から愛聴してきた最大の魅力は「癒しですかね。軽いが涙のある発声が心の琴線に触れますね」。東京新宿区の新大久保には、昭和30年代以前のカラオケだけのスナックがあるようで、よく通った。「60〜70歳代の方も

くりますよ」と、日本の空の改善に意欲満々だ。空港ファイナンス 日本大学に勤めて6年になる。現在の主な研究テーマは「空港の資金調達方法・ファイナンス」「道路予算の地域配分」――など。今年半年ほど米国に留学

し、9月に帰国したばかり。現地では多くの人と出会え、今後の研究の方向性が見えたとのこと。先日開催された羽田空港関連のセミナーでの講演では、冒頭「京都出身ですが巨人ファンです」との一言で聴衆の笑いを誘った。明るさ、笑い、真摯な研究姿勢で今後、研究成果を世に発信し続ける。

◇略歴(かとう・かずせい) 92年3月同大学院経済学研究科卒、96年4月関西外語大学助教授、98年8月米国ケンタッキー大学客員研究員、04年4月日本大学経済学部助教授、05年4月から現職。今年8月まで米国ジョージ・メソン大学客員研究員。現在、航空政策研究会理事、国土交通省「航空物流に関する懇談会」委員などを務める。京都府出身。1964年生まれ。